Takashima Toujyu Kai 会報

高島藤樹会

No.13
2017.1.19

（題字は、竹脇曇卿先生によるものです）

発行
NPO法人 高島藤樹会
〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740(32)4156

「良知の里」

清水 賢一

中国関係のネットで見ていますと最近は、王陽明の研究が注目を集めていることが判ります。その理由は王陽明が明朝を代表する文武両道の思想家だからです。明は、漢民族の王朝で中国人の誇りなのです。

王陽明の学説は心学の一派とみなされていますが、根幹にあるのは、「聖人の学」です。人は皆、学べば聖人になれると言います。頓悟でも漸悟でも、良知は聖人に至る道案内です。しかも『論語』の思想を発展させた学説ですから、これもまた、漢民族の誇りです。

写真①「敬天愛人」は『伝習録』を味読した西郷隆盛の揮毫ですが、「人を愛す」という語句には、分け隔てなく人を愛した「西郷さん」の人柄が浮かんできます。

①

②

清水安三先生も、北京に創立した崇貞学園の講堂に、「学道愛人」と書いて校訓にしています。「愛人」は、西郷さんを真似て同じですが、「道を学ぶ」ことを勧めたのは孔子です。人は、学んで人になります。その趣意をさらに発展させたのが、写真②「学而事人」です。この句碑は北京の陳経綸中学校（旧崇貞学園）と新旭町の湖西中学校にあります。

これは、『論語』にある「学而」と、「事」（つかえる）という字句を組み合わせて、安三先生が創案した四字句です。

現代の社会は、様々な問題を抱えています。人間の善意や良心に対する信頼が損なわれ、蚕食されているというのが現状です。

明の時代も同じです。王陽明は、『大学』を復活させて「致良知」の説を提唱し、精神の救済に努めました。良心や善意というものに社会的な価値を付与して、実践哲学に昇華しています。

「良知の里」に生まれ育った安三先生ですが、終生、藤樹先生の教えを広めて、「聖人の道」を伝えました。また、困窮していた北京の子女を救済して、「人に事える」ことを中国の人に教えた日本人です。今や、藤樹書院と陽明園を擁している「良知の里」は、日本人の原点というだけではありません。

（桜美林大学孔子学院高島学堂長）

ひじりの声

上田藤市郎

電話という文字が表すように音声で遠距離対話ができることは、画期的なものであった。しかし、文字を使用するメールの方が、お互いの時間に拘束されず、記録性も高くて人気がある。

藤樹先生の時代、文字の読み書きができる人は一〇％未満であったから、村落の人々の多くが、先生の講話を耳で聞いて理解していたと思われる。馬方又左ェ門という人は、先生の言葉を単なる知識とせず、即、実践した人である。

識字教育が普及した私たちは、文字を意識して理解し記憶するので、そこで、わかったような気になってしまう。あとで実行すればよいことだと蓄積してしまう。文字を意識せずに考えをまとめ語り、記憶しなければならなかった人々は、それを実行することで言葉の意義を実体験していたと言えるかもしれない。

藤樹先生の教えは、日常生活で繰り返し実践を重ねた結果が、生きた文字になるのだと考えたい。暮らしがよくなった成果が、政治であり、人権や平和も憲法の中では、単なる条文である。私たちの不断の実践が、文言を現実のものにするのである。

高島藤樹会活動

高島市と大洲市との交流会

昨年の十月二十日（木）に、藤樹先生勉学の地　愛媛県大洲市から、「高島市を訪ねる旅」として本市に来訪されました。高島藤樹会と高島市が共催して、大洲市の方々を歓迎し、相互の交流を深める機会がもたれました。その概要を報告します。

●交流会の参加者五十一名
大洲市は二十名（小島健市副市長、上田栄一副議長含む）
高島市は三十一名（福井市長、秋永議長含む）

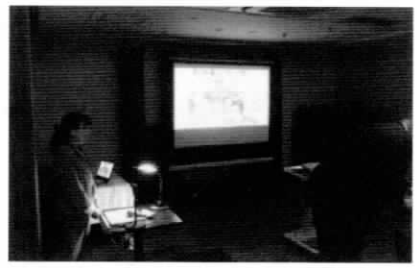
●交流会の内容
（歓迎の挨拶）
高島市長　福井正明氏
（訪問の挨拶）
大洲市副市長　小島健市氏、大洲市議会副議長　上田栄一氏

●乾杯
高島市議会議長　秋永安次氏

《食事・歓談》

●高島藤樹会より
中江藤樹先生の紙芝居紹介「熊山沢蕃の入門」
（北川暢子氏）

●大洲市より
大洲市ＤＶＤ上映
（大洲市観光まちづくり課長　河野氏）



●終わりの挨拶
高島藤樹会　会長　川越清司氏

（高島市観光振興課　森下氏から、概要のメモと写真をご提供いただきました。〈事務局〉）

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

大洲市まつりに参加して

保木　隆

昨年、十一月二日から『大洲まつり』に、高島藤樹会から参加させていただく機会を得ました。

伊予地方南部を反時計周りに流れる清流肱川がつくった盆地に、大洲市はありました。市内、肱南エリアと呼ばれている地域をぶらり歩きをしますと、至る所に文化財、格調ある庵、古い家並が残り、大洲市が伝統や文化を可能な限り後世へ伝えようとされていることを感じました。

「藤樹先生少年像」、「至徳堂」、「大洲城」を始め、随所に藤棚も見られ、藤樹先生が青年時代を過ごされた地として、私の想像を裏切らないところでした。

特に、大洲高校校地に保存されている至徳堂では、先生が日夜勉学を積み重ねられ、『大学』、『孝経』などをこの館で手にされたお姿を偲ぶことが出来ました。

授業間の教室移動で、高校生達が廊下から私達に暖かいあいさつをしてくれたことが、至徳堂の印象を強くさせました。折しも、近年編成された鉄砲隊などが練り歩き、号砲が木霊する大洲まつりが始まっており、街全体に熱気が感じられました。

十一月三日は、肱川河畔の広い会場に多くのテントや屋台が立ち並ぶ大洲祭りのクライマックス。早朝より、高島市役所、藤樹書院、藤樹会との四名で「高島市物産コーナー」を出店し、販売を通じて交流する機会になりました。

中央のステージには地元の各文化サークル、団体による真剣な芸能発表が切れ目なく演じられ、賑やかさに花を添えていました。幸い天候にも恵まれ、肱川には屋形船が周航し、大洲城天守閣が青空にきらきらと輝いていました。

先生の遺徳を偲ぶ至徳堂

「中江藤樹先生ゆかりの高島市から、お越しくださいました！」、大洲市役所あげての呼びかけで、終日、多くの市民の皆様に販売テントに立ち寄っていただけました。以前に、市民交流会等で高島市に来られた方々や昨夏に小学生交流事業に参加した小学生達、その保護者の方までが、私達一行に旧知のようにお声をかけてくださいました。そのような温かい雰囲気を味わえたのも、両市民の心をつなぐ大きな礎として藤樹先生の存在があることを改めて認識しました。

私達の滞在は短い期間で、見たのは少しのエリア、もちろんこれで大洲市を理解したとはとても言えるものではありませんが、お出会いした市民お一人お一人に親しみを覚えるものがありました。

今後も、藤樹先生の教えに学ぶ大洲と高島の両市民が、単なる文化交流を越えお互いに啓発し、成果を語り合う関係の発展を願いつつ帰途につきました。

最後になりましたが、大洲市、高島市、藤樹書院、藤樹会の関係の皆様には、計画から後始末までご支援とご指導をいただきましたことに深くお礼申し上げます。

藤樹人間学塾…
藤樹思想を学び考え実践する

塾長　田中清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に藤樹思想を学ぶとともに、今日的意義を自分の頭で考え、仲間と議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月第一土曜日の午後、開催しています。本会報ではその模様をお伝えいたします。

九月三日（土）午後、第61回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

はじめに「実践人の家」を創設された哲学者で教育者の森信三先生が「私の好きな三人の日本人」という題の講演の中で、最初に中江藤樹を取り上げられていた話をしました。

『孝経』を素読した後、「卿大夫の章」を学びました。卿大夫とは、現代でいえば副知事のような立場です。この章の概意は、正式の衣服でなければ着ない。礼法にかなった言葉でなければ使わない。そうすると、言うこと為すことすべてが規範にかなっており、舌禍事件はなく、何を行おうと人から怨み憎まれることはない…。

フリートーキングでは、中庸の話法とは何か。心の中庸とは何か、等について議論しました。

塾の後は、場所を替えて懇親会を楽しみました。

十月一日（土）午後、第62回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

今回は『孝経啓蒙』の「士の孝」。現代でいえば「公務員・会社員の孝」です。元々は身分社会において、上司に忠孝を尽くすという内容です。しかし先生の解釈は深く、孝徳と忠孝は一本である。愛敬も一体のものである。この一本の孝徳は、天地、万物を生みだす大宇宙に他ならない。この愛敬の誠を尽くすとき、人は大宇宙に接する…。

フリートーキングでは、藤樹先生の孝は現代社会にも十分通用する素晴らしい思想だ。先生が江戸時代初期に小川村におられたことの不思議。先生に啓発されて、桜美林大学を創設した清水安三など多くの人々が社会に役立つ活動をしているのはこの地に特別な風土があるのではないか、など議論が盛り上がりました。

十一月五日（土）午後、第63回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

はじめにプロ野球日本シリーズで優勝した日本ハムの栗山監督が大谷や中田、西川などの選手をいかに育てたのか、を孔子の最重要語「恕」（相手の身になって思い、語り、行動すること）と照らし合わせて考えました。

次に『孝経啓蒙』では、庶人の孝について学びました。……今まで学んできたことの大意は、天子から庶民に至るまで、孝の実践が完全ということは難しいけれども、自分にはとてもと尻込みせず、実行すべきである…。

フリートーキングでは、相手の身になって考えるのは、商売と人間愛では違うのか、など議論が盛り上がりました。

十二月三日（土）午後、第64回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

最初にアドラーの教えⅡ『幸せになる勇気』を紹介し、その中にある科学と哲学と宗教の違いについて考えました。

次に『孝経啓蒙』では、三才（天・地・人）の章について学びました。……それ孝は、天の経なり、地の義なり、民の行いなり。……この章の大意は、孝は天地の原理・原則、人間道徳の根源である。なればこそ人々は孝を手本とする。優れた聖王は、天の原理の明快さ、地の原則の有益さを政治哲学並びに政策として、世の人々を治めたのである。そのことによって…その行政は厳しくなくとも整ったのである…。

フリートーキングでは、現在は易経によれば乱世の真只中。だから世界で独裁的な指導者が現れて混乱している。

乱世の時代にあっては、尚更、外部環境の変化をよく読み、よく考えて、自分を見失わないよう行動しなければならない、など議論が盛り上がりました。

塾の後は、場所を替えて懇親会を楽しみました。

本塾には、新しく参加される方が徐々に増えています。「学ぶは楽し」。皆さまのご参加をお待ちしています。

【藤樹人間学塾　今後の予定】

一月十四日（土）、二月四日（土）、

◎三月四日（土）、四月一日（土）、五月六日（土）、

◎六月三日（土）

●時間　十五時～十七時

●場所　安曇川公民館

◎印は塾終了後、別場所で懇親会あり

「藤樹紙芝居」の紹介⑥

『大野了佐を教える』

（解説）

この話は、藤樹先生年譜、行状伝聞に記されている実話に基づいて描きました。

大野了佐は、藤樹の大洲時代の親しい友人大野勝介の嫡男でしたが、知的能力が乏しいため、父は、侍の跡継ぎを認めませんでした。その了佐がなりたいと考えた仕事は、医者でした。「藤樹先生に医学を習いたい」と、心に決め、頼みにいきました。

先生が、数年間、了佐を教えて判ったことは、能力の低さと格別の粘り強い性格でした。大洲における了佐の学問は、藤樹先生の脱藩で途絶えました。しかし、その後も四年間、父に頼み続けて、近江の小川村への留学が実現しました。

能力の高低で、人を差別しない先生の教育方針と、長所を最大に生かす教育法のお陰で、了佐は三年後、医者としての力を付けることができました。先生は喘息を患い、又、多忙な生活の中で、了佐に精根尽きるような力を注ぎ、ついに立派な医者を育てたのです。

心を砕いて教えた先生、応えて一心に努力した了佐の姿は、後世の多くの人々、子供にも大人にも、大きな感動を与え続けているように思います。

（紙芝居）

① ここは、伊予の国大洲藩、二百石（年俸一千万円位）どりの大野家です。了佐は、父の部屋に呼ばれました。

了佐「父上、何のご用ですか。」

父「大事な話がある。了佐、お前は、生まれつき、字を覚えたり、理解したりすることが苦手である。武士のあとつぎとして、つとめるのは無理だ。自分に合う仕事を、何か考えなさい。」

しばらくして、うつむいて考えていた了佐は、顔を上げました。

了佐「…私は、やりたい仕事が一つだけあります。」

父「どんな仕事か、言ってみよ。」

了佐「それは、医者です。病気で苦しむ人を治し、みんなに喜んでもらえるよい仕事です。」

父「何じゃと…、覚えることの苦手な了佐には無理じゃ。」

了佐「私は、石にかじりついてでも、がんばります。」

父「医者になるには、人一倍学問をしなければならん。第一、大洲には医学を教える先生もいない。考え直すのじゃ。」

② **了佐**「父上は、『無理じゃ』と言われたが、私はどうしても医者になりたい。しかし、どうやって先生をさがせばよいのか。あっ、大洲一番、学問に熱心な方がおられるぞ。中江与右衛門先生に、医学書の読み方を教えてもらおう。」

了佐はさっそく先生の家へ行きました。

先生「どんな用かな。」

了佐「先生、さっそくですが、私にも医学書の読み方を教えてください。父は、私に武士のあとつぎをゆるしてくれません。しかし、私には、医者になり、人の役に立ちたいという夢があるのです。どうか、お願いします。」

先生は、必死に頼む了佐のことを、気の毒に思って、承知しました。

③ さっそく、了佐は喜んで先生の所へ勉強に来ました。先生は、最初に『医方大成論』という医学の入門書を教えました。たった二つか三つの言葉を朝から夕方まで、くり返し、くり返し二百ぺんも読ませてようやく覚えられるのです。

先生「了佐、夕食をすませなさい。その後、続きをやろう。」

了佐「はい。分かりました。」

夕食をすませて、続きの勉強をしました。

先生「了佐、先ほど勉強した言葉を言いなさい。」

了佐「はい。えーっと、えーっと、出てきません。思い出せません。」

先生「そうか。まだ、勉強が足りないとみえる。最初から、もう百回読んで覚えなさい。」

こんな調子なので、了佐の勉強は、他の若者たちと違ってなかなか進みませんでした。

数年が過ぎ去ったある日、先生は了佐に言いました。

先生「私には、事情ができて、了佐に医学を教えることができなくなった。これまでに付けた力で、なんとか一人でやりなさい。」

了佐「そうですか…。先生、分かりました。読み方が少しずつ分かってきたので、やってみます。」

④ まもなく、先生は、近江で一人さびしく暮らしているお母さんと生活するため、大洲藩を脱藩したのです。しかし、先生が近江に帰ってからの了佐は、医学書を一人で読もうとしても、漢字の読み方も意味もさっぱり分からず、困りました。

了佐「ああ、先生には、よく分かるように教えてもらえたので、少しずつ

勉強が進んだのになあ。今は進むことができない。困ったなあ。このままでは、医者になるのは無理だ。どうすれば、いいのか。」

学問が進まなくなった了佐は、『何かよい方法はないだろうか』と、考えました。しかし、困っていたのは、了佐一人だけではありません。何人かの若い武士たちも、学問を習っていたからです。

⑤　そのうちに、お殿様に申し出て、近江の先生の所へ行って、学問を習う若者が、次々と出てきました。

了佐「父上、私も近江へ行かせてください。勉強を続けたいのです。このままでは医者になれません。」

父「近江にわざわざ行っても、医者になれるかどうか、分からないではないか。それに、近江は遠い。金もたくさん必要だ。ほかの仕事を考えなさい。」

了佐「父上、一生のお願いです。」

父「だめだ。ゆるさぬ。」

⑥　了佐は、この後も、近江へ行くことを頼み続けました。父は、何年たってもあきらめない了佐に、困っていました。

父「了佐、何かほかの仕事は見つからぬか。」

了佐「父上、私は一生懸命、考えてきました。しかし、どうしても医者になりたいのです。」

父「了佐も分かっていると思うが、色々な病気を治すためには、たくさんのことを学ばなければならん。お前には、無理だ。」

了佐「先生は、いつも、『一心に努力すれば、力がつく』と、言われました。私には、こつこつがんばる心だけは、人一倍あります。父上、一生のお願いです。先生の所へ行かせてください。」

父「どうしてもあきらめぬというのか。よし分かった。しかし、先生に『見込みがない、医者になるのは無理だ』と言われたら、すぐに大洲に戻るのだぞ。」

了佐「はい、分かりました。父上、ありがとうございます。さっそく、先生の所へ、手紙を出します。」

⑦　五年目に、ようやく父のゆるしを得た了佐は、はりきって、近江の小川村にやって来たのです。

了佐「先生、大野了佐です。ようやく、父のゆるしを得て、来ることができました。」

先生「おお、了佐か。とうとう父上が承知されたのだな。よかったなあ。了佐は、医者の力を付けるまで、とことん、ここでがんばりなさい。」

了佐「先生、よろしくお願いします。」

先生は、了佐を温かく迎えましたが、医学の教え方は、ふつうのやり方では、無理だと考えていました。了佐を一人前の医者にするためには、くわしい医学書がいります。しかし、了佐が読めるような本はありません。そこで、分かりやすい本を、自分で書くことにしました。本屋から、日本だけでなく、中国の医学書も買い、了佐のための医学書『捷径医筌（しょうけいいせん＝「医学の近道」の意味）』の本書きが始められたのです。

⑧　今日は、小川村で、了佐が初めて医学を習う日です。先生は、教えたい内容の教書が五枚書けたので、了佐の下宿に使いを出し、習いに来るよう伝えました。

了佐「先生、習いに来ました。よろしくお願いします。」

先生「今日から、始めることにした。了佐、これが今日の教書だ。分からないことは遠慮なく、たずねなさい。」

了佐は、教書を見て驚きました。医学の内容は、先生の筆で、一字一字書かれたものでした。

了佐「先生、私のために書いてくださったのですか。」

先生「そうだ、この方法が、了佐が医者になる近道であると考えたのだ。分かりやすく書いてある。これをよく学び、全部覚えなさい。私は、了佐の学問が進めば、次々と書くつもりだ。ともにがんばろうではないか。」

了佐「忙しい先生が、私のために一枚一枚書いてくださるのですか。私は何という幸せ者でしょうか。もったいないことです。ありがとうございます。」

了佐は、涙ぐみながら心からお礼を言い、先生が書いた教書を受け取りました。

⑨　了佐は、熱心に勉強しました。分かりやすく書いてありましたが、分からない時は、何度も先生の所へ行きました。このころの先生は、門弟たちに講義をし、また、自分の学問をまとめて本にするなど、毎日、大変忙しい生活でした。その上、了佐のために教書を書き始めたので、夜遅くまで起きて仕事をする日が続きました。そんなある日、門弟たちがひそひそ話し合っています。

門弟1「このごろ先生は、夜中まで仕事をしておられるぞ。」

門弟2「ぜんそくで、時々咳き込んで疲れたご様子だ。」

門弟1「了佐のために教書を書いておられるようだ。」

門弟2「あまり、無理をされないようにと、申し上げよう。」

⑩　門弟たちは、先生の部屋をたずねました。

門弟1「先生、このごろ夜中まで仕事をしておられるのは、了佐のために教書を書いておられるからですか。」

門弟2「了佐を教えるだけでも時間がかかるのに、その上、教書を書かれるのは大変です。お体は大丈夫ですか。」

門弟1「それに、私たちの講義の時間が減りました。」

先生「言いたいことは、分かった。まず了佐のことだが、お前さんたちに比べると、学問を身につける力が弱い。しかし、やりとげようという根気は、人の何倍もあり必死にがんばっている。そんな了佐が一人前の医者になれるよう、できるだけのことをしてやりたい。次に、お前さんたちのことだ。さむらいとして選ばれて学問を習いに来ているものが多い。私が少し教えればすぐに理解できる。お互いに学び合うことも大切だ。工夫して学問を深めなさい。」

門弟1「先生、よく分かりました。あれこれ行ったことをお許しください。」

先生の言葉は、門弟たちの心に響きました。先生は心の底から、みんなのことを考えておられることや、心に決めたことは、必ずやり遂げる人だと分かりました。

⑪　了佐が小川村で勉強を始めてから三年あまりが過ぎました。今では、先生から教書をもらうと、自分の力で読みこなし、理解ができるようになっていました。了佐は、今日も先生から教書をいただく日です。

先生「了佐、来なさい。さっそくだが話をしたい。この教書がお前さんに渡す最後のものだ。今日からしばらくかかると思うが、しっかりと勉強を仕上げなさい。」

了佐「先生、『この教書が最後』というのは、どういうことでしょうか。」

先生はやさしい笑顔で答えました。

先生「いよいよこれで、了佐が一人前の医者になる力が付くということだよ。」

了佐「先生、本当ですか。この私にそんな力が付いてきたのですか。」

了佐は思わず、先生の前で泣き伏しました。学問が苦手な了佐でしたが、とうとう、その努力で医者としての力を付けてきたのです。

先生が了佐に書いた医学書（捷径医筌）は、四〇〇字詰めの原稿用紙にして千枚にもなるものでした。

⑫　いよいよ、了佐が大洲へ帰る日になりました。喜びに輝く晴れやかな旅姿で先生の所へやって来ました。

了佐「先生、長い間お世話になりました。私はうれしくて、うれしくてたまりません。」

先生「了佐はよくがんばった。うれしい気持ちは、わたしも同じだよ。大洲に戻っても、学んだことを忘れないよう勉強を続けなさい。そして、心のやさしい医者になりなさい。」

了佐「はい、先生のお言葉を忘れません。…先生、どうかお体を大切になさってください。」

こうして了佐は、喜び勇んで旅立ちました。了佐が大洲で医者を志し、先生から医学の手ほどきを受けた日から、実に九年の年月がたっていたのです。了佐が帰ってから、先生は一緒に見送った門弟たちに言いました。

先生「私は、了佐の教育に力の限りを尽くした。しかし、かんじんの了佐にがんばる気がなかったら、とても一人前の医者にはなれなかったであろう。お前さんたちは、たくさんの才能をもっている。やろうという気があれば、どんなことでもできるはずだ。」

門弟たちは自然に頭が下がる思いで、先生の言葉を聞きました。

⑬　了佐は医者としての志をもって、ふるさと大洲へもどってきました。

了佐「父上、ただいまもどりました。先生にみっちり教えていただき、医者の力を付けてもどれました。先生のおかげです。私のために教書を書いて、教えてくださいました。」

父「医者になれたことを信じてもよいのか。お前は何という幸せ者だ。」

了佐「私は、先生のような心の温かい医者になりたいと思います。」

父「先生のご苦心に報いるには、それが一番じゃ。」

大野了佐は、間もなく母の実家『尾関家』で『尾関友庵』と名乗る医者になり、七十七歳まで、真心をもって治療する先生と慕われて、生涯を医者として活躍したのです。

また、自分のおいを医者にするため、熱心に教育して立派な医者に育て上げました。

（おしまい）

シリーズ④「郷土高島の先人に学ぶ」

「学而事人」を貫き通した生涯『清水 安三』

足立 清勝

『学而事人』（がくじじん）この言葉は清水安三先生の教育精神を物語る終生大切にされた言葉で「学問は決して自分のためだけにするものではなく、身につけた力を社会に役立てることが大切です」という意味です。

清水安三先生は一八九一年、現在の高島市新旭町北畑に生まれました。安三少年が六歳の時に伯父に連れられ、九月二十五日に藤樹書院の藤樹祭に行き、その時の印象が生涯を通して中江藤樹先生を崇拝するきっかけとなる大きな出来事だったことが、遺稿集「石ころの生涯」の中で語られています。

安三先生は地元の小学校から県立第二中学校（現県立膳所高校）へ入学、米国人の英語教師ウイリアム・メレル・ヴォーリズに出会い、そこでキリストの教えに感化、大津教会で受洗。その後、同志社大学神学部に進学。その間に中国の名僧鑑真が幾度もの苦難を乗り越え日本に渡った話に感動し、多くの人たちの助力を得て、一九一七年日本組合基督教会の宣教師として中国は奉天（現瀋陽）に赴任。翌一九一八年大連にて彦根出身の横田美穂と結婚、北京に転居後の一九二〇年華北部一帯を旱魃による大飢饉が襲い、農民、幼い子どもたちが共に身の危険と死の淵に晒されます。夫妻は連日、北京郊外各地から大勢の子どもたちを大八車で朝陽門外に設置した応急施設へ連れ帰り収容します。

延べ七九九名を救出、これが学園の前身、災童収容所となります。

その後、貧しい中国人、朝鮮人の子どもたちと日本人も平等に扱って教育する崇貞工読女学校（後の崇貞学園）を設立、午前は勉学、午後は刺繍などの手仕事を指導、生徒の自立を最終目的に育てていきます。しかし、学園運営や校舎建築には莫大な費用を要し、先生は生徒たちが作った刺繍製品や自著を売り歩き、日本や米国まで寄付金集めに奔走、日夜を問わず、わが身も顧みない日々を送ります。

先生は最愛の伴侶を失っても、日中戦争で戦闘状態の最中にあっても学園運営の傍ら、貧民街に無料の医療施設設置や飲料用水の井戸堀り、授産・識字教育など数多くの社会事業を推進し、「北京の聖者」とまで呼ばれます。

一九四五年日本の敗戦。

崇貞学園運営は中国政府により接収され、終わりを告げます。

一九四六年三月十九日先生夫妻はすべてを失い日本に帰国、この時、安三先生五十四才、再婚していた郁子夫人五十三才。

しかし、夫妻は学校を創りたいとの願いからすぐに行動を起こし、二十二日には一面焦土と化した東京へ移り、翌日には街中で再会した賀川豊彦からバラックの建物を紹介され新たな学園建設の第一歩を踏み出します。帰国からわずか四十八日目文部省から桜美林学園設立の認可を取り付けたのです。

以来、多くの人たちの助けと夫妻のどん欲なまでの学園づくりへの執念は国内外へと足を延ばし、講演、著書販売、人材確保など学園建設のための献身的な行動を展開していきます。

そして、現在の一万人超の生徒、学生を擁する総合大学、桜美林学園へと発展していったのです。

一九八八年一月　清水安三先生九十六歳にて召天。

亡くなる前日まで数限りない子どもたちに接し、愛と慈しみの心をもって行動、実践しました。

中国には「井戸を掘ってくれた人を忘れない」の諺がありその言葉通り、北京の崇貞学園は現在、北京市有数の進学校、陳経綸中学校として多くの生徒たちが勉学に励み、その正門の傍らには安三先生の胸像や崇貞学園創立記念のレリーフが功績を称えています。

「わしは幼稚園から大学までの学校を創るのが生涯の夢」と語っていた先生、今なお東京町田市の桜美林学園は学園全体が美しい桜の木に覆われ、陶像の藤樹先生が見守る中、市民が自由に出入りのできる開放的な学舎となっており、清水安三先生が目標とした自由な学風が学内の至る所に生かされています。

清水安三先生銅像
高島市役所正面南側

良知館通信⑤

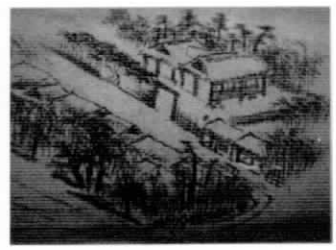
山本　義雄

心のふるさと藤樹書院は、上小川集落の中ほどに位置する。敷地の南寄りに書院、南西に表門その北側に土蔵がある。

藤樹書院の正門の変遷を時代をさかのぼり調べてみると、「藤樹書院の歴史」の中に延享四年（一七四七）百年祭に正門建立とある。この時の門は、妙専寺から東へ進み、藤樹書院の境内で熊沢蕃山入門懇願の跡付近と考えられる。現在、藤樹書院を訪れた人のシンボルとなる。記念写真位置の藤樹書院の四足門を新門と称されるのは、弘化四年（一八四七）藤樹先生二百年己辰祭に際して新たに建立。

明治十三年（一八八〇）の上小川村の大火で講堂は類焼したにも関わらず、この門と隣接する土蔵は幸いにも災禍を免れた。

このことは、分部家の家臣で江戸留守居役、三宅頼母の娘である鉸子が関係する。江戸で誕生した鉸子は明治十四年（一八八一）四月十二日次男延之輔を伴い大溝の地に里帰りした。鉸子は二宮尊徳の嫡男弥太郎（諱尊行）の妻である。延之輔はこの記録を「江州紀行」として書き残している。



〝書院祝融の災い罹り、昨年灰燼となり今遺るものは、門屋と藤樹となり…〟と記述がある。又、明治四十一年（一九〇八）に藤樹先生贈位報告、常省先生二百年祭が行われた時、表門の藤のご紋の傷みがひどくケヤキ一枚板の修復として鏡板が作られる。

この鏡板の寄進は、藤樹先生の研究家、前神戸大学教授の森信三先生である。先生は国民教育者で実践人の家を主宰された。〝人生二度なし〟という有名な言葉がある。

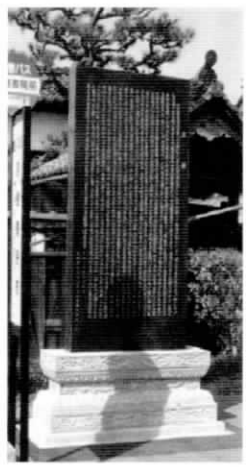
書院正門前にかけられた石の太鼓橋は、平成十四年ころに改修された。門前左側にある美形の松は、樹木の状況からみて百二十年位経つものと推定される。

藤樹先生にまつわる石碑②
藤樹書院前の「孝経」碑

上田　藤市郎

藤樹先生は、三十三歳の夏、孝経の意味深長なことに感激され、それ以来、毎朝、夫人と共に孝経を拝誦された。藤樹書院では今も「講書始め」と「常省祭」に孝経が拝誦される。孝経の文「孝は徳の本なり」に由来して、江戸時代光格天皇が藤樹書院を「徳本堂」と命名された。

この石碑は、藤樹先生生誕四百年に際し、藤樹先生の直筆「心画孝経」の字体を手彫りで刻字したものである。孝経の冒頭に出てくる、仲尼（孔子）の生誕地、中国、山東省、曲阜の石匠が、孝経全体の約半分九百字を彫刻した。孔子の高弟、曾子の故郷、山東省、嘉祥県の石材で、幅一七〇、奥行十五、高さ二八〇センチ、重さ五トンである。高島市内、県内、全国の約二七〇名の有志賛同者の寄付によって建立された。総額二一〇万円余である。特に中国山東省の曲阜や嘉祥県の曾慶淳氏ら関係者の絶大な協力の結果である。



平成二十年四月二十日、論語普及会学監、伊與田覺氏を迎えて除幕式が行われた。

※伊與田覺氏は平成二十八年十一月二十五日百一歳で逝去された。

賛助会員一覧

ご協力ありがとうございます

◎税理士法人・小畑会計事務所
（新規会員　高島市新旭町旭）
○ウェストレイクホテル可以登楼
○株式会社 大山建設
○株式会社 桑原組
○有限会社 宏和商事
○有限会社 白浜荘
○社会福祉法人 新旭みのり会
○ソエダ 株式会社
○株式会社 TADコーポレーション
○鉄屋商事 株式会社
○株式会社 戸井薬局
○とも栄 藤樹街道本店
○中村印刷 株式会社
○株式会社 中村測量設計
○ニッケイ工業 株式会社
○八田建設 株式会社
○有限会社 馬場塗装
○三田村印刷 株式会社
○有限会社 綿庄食品店

（五十音順）